one

ダムとチェリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｏｎｅ

【Ｎコード】
Ｎ０８１３ＢＡ

【作者名】
ダムとチェリー

【あらすじ】
「人間１人１人に必ず眠っている力がある」
能力を開花させた者は『バトラー』と呼ばれ、バトルロワイヤルへの挑戦権を獲得出来る。

バトルロワイヤル。
それは１０００年以上の
歴史を持つ大会。

そこでの優勝は
世界の実権を
握ることを意味する。

現チャンピオン、
『シデン』への
主人公『カイト』の
挑戦が始まる。

one　～序章～

「俺はカイト！
まず、この世界に
ついて説明しようか！」

この世界では、

「必ず人間1人1人に
　眠っている力がある」

そう言い残した
バトルロワイヤル
創設者、「アリア」の
言葉を信じ、

日々人類は自分の力を
開花させるため
鍛練に励んでいる。

能力を開花させた者は
『バトラー』と呼ばれ
バトルロワイヤルに
参加可能となる。

バトルロワイヤルとは、
年に一度行われる
一人一人自分の能力を

使っての戦いである。
１０００年以上の歴史が
あり、人々はそこでの
優勝を目指して
生活している。

ルールは簡単。
?武器は使用禁止。
　必ず自身の能力を
　使用して戦うこと。
?男女参加可能。

この二つだ。

このバトルロワイヤルで
優勝するということは
世界の実権を握る
こととほぼ同じになる。

そのせいもあってか、
近年、危険な考えを
持った奴らがこの
バトルロワイヤルに
挑戦してくることが
多くなっている。

「だけど！！
現チャンピオン、
『シデン』さんがいる限り
この世は大丈夫さ！」

シデンとは、１００年に
一人と言われた逸材
であり、今や世界中の
大スターである。

彼のチャンピオンたる
由縁は、能力を２つ
使えるということだ。
ここでその能力を
紹介しよう。

？『黒刀・夜叉燕』
（こくとう　やしゃえん）
瞬時に刀を自由自在に
出すことが出来る。一度に７５０本と制限が
決められているが、
余程の実力者でなければ
近付くことすら不可能。

？『瞬神・月影』
（しゅんしん　ツキカゲ）
目にも留まらぬ速さで
移動することが可能。
光よりも１０倍以上速く

その姿を見ることすら
不可能である。

?、?を組み合わせた
彼の必殺技
『月光神・牙狼』は
目にも留まらぬ速さで
敵を切り付ける
誰にも破ることが
出来ない伝説の
一太刀であるのだ。

「俺はシデンさんに
憧れてバトラーに
なると決めた！」

「最初にシデンさんを
倒すのはこの俺だ！」

現チャンピオン
『シデン』への
彼の挑戦が始まる。

one　～第1章～

バトルロワイヤルへ
出場し、現チャンピオン
であるシデンを倒すと
決めたカイトだが…

１０年間無敗記録を持つ
シデンを倒すのは
至難の業だ。

ましてやカイトはまだ
バトラーですらない。

バトラーになるためには
『開呪魂師』と
呼ばれる人間の力が
必要になる。

彼らはその人間に
秘められた力、
『呪魂』を導く
大切な存在なのだ。

ただし、誰にでも
開呪魂師に会う権利が
あるわけでは無い。

『呪魂』それは
その人間の精神から
成り立つものである。

並外れた精神力が
無ければ開呪魂した際、
呪魂に精神を全て
吸い取られてしまい
植物状態に陥る。

そのため、
世界最高機関、通称
『ヴァルザス』により
開呪魂する際

『ｓｐｉｒｉｔ　ｍｅｔｅｒ』と
呼ばれるもので
精神力を計測し、
基準に満たない者は
開呪魂を認めない
と定められた。

この基準がかなり
厳しいため、
年間バトラーは
およそ５０人程しか
生まれないらしい。

そんなことも知らずに
カイトは開呪魂師の
元へと急いでいた。

「あ！あれかな～」

小さな寺のような建物の
中で受付をしていた。

「開呪魂しに来た方は
こちらの列に並んで
　お待ち下さ～い」

係員のような人の声。
言われるがまま
列の後ろについた。

今日は運が良いのか
空いていたが、多い
時には１００人程の
長蛇の列になるらしい。

「それでは
　次の方どうぞ～」

「よしっ！
　やっと俺だぜ」
カイトは高ぶる感情を
抑えながら前へ進んだ。

そこには妙な
機械があった。

「メーターとかあるし…
何か測るのかな？」

「これは
『ｓｐｉｒｉｔ　ｍｅｔｅｒ』と
言って精神力を測る
機械なんですよ～」

「はぁ！？　そんなの
聞いてねーぞ！？」

あえて口には
出さなかった。

「それでは今から
計測を始めますんで。
精神力を高めるには
人それぞれなんで
基本自由に動いて
もらって構いません。
ただし、あんまり
激しい動きは
ご遠慮ください。」

「えーマジで！？

どうしようどうしよう
精神力…精神力…
何だそれ！？　考える程
わかんなくなってく…

よしっ　ここは一発
言ってやるとするか！」

頭の中で考えた結果、

「俺はぁ～！！
チャンピオンの～！
シデンさんを～！！
倒～～～す！！」

叫ぶことになった。

「な、何だと…！？
こんなのこと……
あのシデン以来だ！」

メーターが計測不能を
示していた。

「どうぞ、
次へお進み下さい…」

「やったぜ！！何か
よく分かんねーけど

クリアってことだな？」
本当によく分からない
まま奥へ進んだ。

そこには開呪魂師が
立っていた。

「あなたは
精神力の高さの基準を
突破した者。
ましてや計測不能…
開呪魂師としての
腕が鳴るわね…。」

「そこに立って…」
言われた通り
星型の魔法陣の中に
移動した。

「偉大なる創設者
『アリア』よ！！
この者に力を！！！」

魔法陣が光り輝き、
その光がカイトを
包み込んだ。

「な、何だこれ！？」
思わず口にする程の

神々しさだった。

「私の出来ることは
　やりました…。後は
あなたが自分の力を
信じ、願えば、あなたの
呪魂はきっと応えて
くれるでしょう…。」

「あ、ありがとう
　ございます！！！」

礼を言い、開呪魂師の
元を後にした。

自分の力を
信じ、願うこと。

「俺なら出来る。
俺ならきっと……
俺ならきっと
倒せるはずだ！！！
憧れのシデンさんを！」

そう思って、
拳を振り上げた。

それと同時に、強い風が
吹き上がった。

「ん？」

次は振り下ろしてみた。
下向きに強い風が
吹いたのだった。

「これが俺の力か！」
そう思った時

「『双迅・疾風』
（そうじん・はやて）
それが君の力だ。」

そんな声が
聞こえた気がした。

ついにバトラーに
なったカイト。

呪魂を使いこなす
ために次なる場所
へと向かって行った…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0813ba/

one

2012年1月2日02時45分発行